

(第2回)

中
2019

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で19ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 問題冊子、解答用紙のいずれにも受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
- 問題冊子を持ち帰ってはいけません。

受験番号	
氏	名
	ふりがな

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

記憶をたぐれば、まずどんよりとした曇天^{どんてん}が思い浮かぶ。冷静に考えたら、年中曇^{くも}っているはずはなく、すつきりと晴れる日もあったに違いないのに、なぜか思い出せない。厚ぼったい雲で暗灰色に塗^ぬりこめられた空は、高い建物で視界がさえぎられないせいもあって、天井の低い部屋に閉じこめられているようなAがある。海もまた、空に負けずに陰気な色をしている。単調な波の音も、岩場に白くくだけるしぶきも、どこか不穏で寒々しく、生ぐさい潮風はなにかの呪い^{のろ}のようにねばつくく体にまとわりつく。

① あんなどころには、二度と戻りたくない。そのつもりもない。三郎の決意は、大学時代から一度たりとも揺^ゆらいだことがない。

いつのまにかとだえていた音楽を再生する気にもなれず、三郎はイヤホンをはずしてシートにもたれかかった。眠気もすっかり失^うせていた。

隣の四人も、もはや車窓には目もくれず、誰かが持参したらしい菓子をつまんでいる。

「これ、おいしい」

「よかった。孫が教えてくれたのよ、人気のお店なんですって」

そこからひとしきり、孫の話になった。就職活動や大学受験の話題で盛りあがっている。全員、孫もほぼ同年代のようだ。三郎の娘たちと同じ年頃か、少し上の孫がいるということは、外見から推測したよりも年輩らしい。下手をしたら、七十になったばかりの母より上かもしれない。

だが、② 見た目は完全に逆転している。一年前に会ったとき、半世紀も連れ添った夫を亡くした直後だったとはいえ、母は彼女たちよりはるかに老けて見えた。都会の年寄りはずなせこも若々しいのか、三郎はいつも不思議に思う。ほどよい刺激に彩られた自由な日々を謳歌^{おうか}しているおかげで、老けこまないのだろうか。

「そうそう、先月ランチした銀座の和食屋さんね、恵比寿に姉妹店ができたんですって。今度行ってみない？」

「いいわね。でもわたし、ちよつとダイエットしなきゃ。近頃太っちゃって」

「うそ、全然見えないけど。最近テニスはなさってないの？」

「ヨガもいいわよ。じわじわ効いてくるの」

母はこうして友達と旅行に出かけたことはないだろう。旅行どころか、村の外へ出る機会すら、めつたになかったはずだ。街なかでの外食も、スポーツジムも、母の人生には存在しない。母が彼女たちのように、^③屈託なく笑っているところを、三郎は見たことがない。

でも、今からでも遅くないと思うのだ。

東京に来れば、新しい生活がはじめられる。コンサートや芝居を観るなり、ちよつとした習いごとをはじめたり、ただ街を散策するだけでも、^④新鮮だろう。嫁との同居が気詰まりなら、小さな部屋でも借りればいい。ひとり息子としてそれくらいまかなう余裕はある。

今晚か、明日の法事が終わつた後にでも、もう一度話をしようと思つて三郎は心に決めている。

母はもう十分がんばつた。来る日も来る日も家事をこなし、漁協の婦人部でも働き、なにより^⑤あの父にかいがいしく仕えてきたのだ。これからは榮に氣ままに、快適な余生を過ごしてほしい。もう母を縛りつけるものはない。死んだ夫に、しかもやりたい放題やつて大往生したあのひとに、氣がねなんかいらぬ。

三郎の足を生まれ故郷から遠ざけていた一番の理由は、空でも海でもない。最期までわかりあえないまま、父は逝つた。

〈中略〉

父は漁師だった。

漁師とひと口に言っても、大型船で長期にわたって世界中をめぐる遠洋漁業と、近場の海で日帰りの漁をする沿岸漁業では、仕事のやりかたも暮らしぶりもかなり違う。三郎の家は、父も祖父も曾祖父も、おそらくその先祖も、代々沿岸漁業を^⑥生業なりわいとしていた。

学校には、遠洋漁業の漁師を父に持つ友達も何人かいた。漁場は世界各地に及び、一度の航海は短くても数カ月、長ければ一年以上も戻ってこない。家族と過ごせる時間は、ひとつの漁が終わって次の船出までの休暇中に限られる。そのはじまりと終わりは、子どもたちの表情からすぐに知れた。

三郎も幼い頃は、離れ離れで暮らさなければならぬ家庭を気の毒に思っていた。家に帰って父の姿を見れば、^⑦うれしく心強く感じた。そうでなくなったのは、いつぐらいからだったのだろうか。

天気が荒れている日を除けば、父は夜明け前に出港し、午後早くには帰宅した。三郎が学校から帰る時間には、茶の間でテレビを見ながらちびちびと酒を飲んでいた。ちゃぶ台には母のこしらえたつまみが並んでいる。なかほしいとき、父は腰を上げる必要はなかった。おうい、と台所に向かつて声をかけるだけで、母はなにを求められているのかをただちに察し、酒のおかわりや追加の肴さかなを用意した。

ごくまれに、たとえば三郎がおやつを出してもらったり、なにか話しかけたりしていて、母が父の呼びかけを聞き逃すと、面倒なことになる。おい、と父はあからさまに不機嫌な声を張りあげた。

そういうとき、母は決して言い訳せず、すべてを中断して父の命令に従った。後回しにされた三郎は^⑧不機嫌ぼこまきだつたけれど、母は息子を守ろうとしてくれているのだとやがて気づいた。三郎の用を優先すれば、父が怒りの矛先ぼこざきをこちらへ向けてくるかもしれない。母に対しては、父は乱暴な口は利いても手は上げなかった。一方で、三郎には容赦ようしやがなく、頭をはたかれたり肩を小突かれたりするの日常茶飯事だった。

父は悪い人間ではなかったと三郎は思う。ただ、^⑨どうしようもなく気分屋きふしやだった。日によって機嫌がよかつ

たり悪かったりするのには、まだわかる。漁師というのは非常に不安定な仕事である。収獲が少ない日も、せつかくの獲物にいい値がつかない日もある。でも、自分から楽しそうに話しかけてきた数分後に、鬼きのような形相ぎやうそうでどなり散らされては、子ども心にわけがわからなかった。

「海の天気は変わりやすいからな。一瞬でも気を抜いたら、命取りになる」

父はもつともらしく言っていた。

三郎のほうは、身の安全のために、天候よりも父の気分を読まなければならなかった。命までは取られないにしても、冷たい海に突き落とされて荒波にもまれるのはごめんだ。熟練の漁師が雲ゆきや風向きから嵐の訪れを察知するのと同じように、細心の注意をはらって父の言動を観察した。

観察しているうちに、父^⑩という人間を少しずつ理解できるようになった。理解するにつれ、失望した。

父は視野が狭く、無教養で粗野でがさつだった。口が悪く、おまけにおそろしくがんこだ。なんでもかんでも主観的に断定し、少しでも反論されようものなら——同意しかねるといふ顔をされただけでも——激怒する。ばかにすんな、というのが父の口癖だった。

三郎がうんと小さいうちはよかった。お父さんの言ったとおりね、となにかと父を立てようとする母にも、疑問は抱かなかつた。しかし成長し、子どもなりに知恵がつくに從つて、父の発言がひっかかるようになった。

小学二、三年生くらいまでは、父の誤りをいちいち指摘していた。先生にそう教わったとか、本にこう書いてあるとか、説明しようとした。そんなことをしてもむだだと悟さとるまでに、たいして時間はかからなかった。それ以降は、父の言葉を黙だまって聞き流すようになった。同じ頃から、まじめに勉強するようになった。父のようになりたくなかった。もつと視野が広く、教養があり、洗練されたおとなになりたい。世界はもはや、「お父さんの言ったとおり」には見えなかった。

成績はみるみる上がり、母は喜んでくれたけれど、父はぶつくさ言っていた。

「勉強なんかできたって、腹の足しにもならん」

そんなことはない和三郎はすでに知っていた。魚を獲るためには、国語も数学も英語もあまり役に立たないかもしれないが、広い世の中に出ればそうではない。たくさん勉強していい学校に入り、ゆくゆくはいい会社で働く、それが三郎の目標だった。この狭い村から脱出して、いい人生を歩むのだ。

「^⑪いい気になるなよ。つけあがってたら、ろくなことにならねえぞ」

父は苦々しげに吐き捨てた。否定されればされるほど、三郎はやつきになって、いよいよ勉強に励んだ。大げんかになったのは、高校二年のときだった。東京の大学を受験したい和三郎が父に告げたのである。

「やめろ、やめろ。大学なんて行つたって、なんの役にも立ちやしない」

そっぽを向いて酒を飲みはじめた父を、三郎は必死に説得しようとした。何年も前、父とは会話が成立しないと B 以来、ひさびさに心をこめて話した。

高校ではずつと首位の成績をとっている。有名大学に合格するのも夢ではないと、教師も応援してくれている。本格的に受験対策をするために、街の予備校に通つたらどうかともすすめられた。

「いい大学を出ておけば、就職するときにも選択肢が広がるから」

「選択肢？」

父が低い声でさえぎった。

「おれは漁師にはならない」

三郎が言うと、父はかっと目を見開いた。息子の本心はうすうす感じとっていただろうに、とんでもない暴言を吐かれたかのように、にらみつけてくる。

「なんだと？」

浅黒く日焼けした父の両目は、鮮度の落ちた魚のように充血し、口の端に唾^{つば}がたまっていた。^⑫ ひどく醜^{みにく}かった。

「おれは、漁師にはなりたくない」

C、と心の中では言っていた。

「迷惑はかけないよ。奨学金をもらって、生活費もアルバイトでなんとかする」

だから、じゃましないでほしいんだ。

「ばかにすんな」

父が血走った目をつりあげ、ぶんと荒々しく腕を振りあげた。

「お前、何様のつもりだ」

三郎は片手で頭をかばった。そして反射的に、空いているもう片方の手で父を突き飛ばした。

ふたりとも座っていたから、そんなに力が入っていなかったはずだ。が、反撃を予測していなかったせい、あたりどころが悪かったのか、父はあっけなく体勢をくずし、畳にあおむけに倒れこんだ。

心配そうに見守っていた母が、小さく悲鳴を上げて駆け寄ってきた。その手をじゃけんに振りはらい、父は立ちあがった。顔が真っ赤だった。殴^{なぐ}り返されるかと思ったけれど、憎^{にく}しげに三郎をねめつただけで、部屋から出ていった。

「勝手にしろ」

父もきつと内心ではあきらめていたのだろう、と後に三郎は思い返すことになる。息子が自分とちつとも似ていないことを。血はつながっていても、話がまるで通じないことを。

（瀧羽麻子『ありえないほどうるさいオルゴール店』）

問一 A に当てはまる語句としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 圧迫感 イ 罪悪感 ウ 緊張感 エ 一体感

問二 — 部① 「あんなところ」とはどこのことか、文中より五字で抜き出して、答えなさい。

問三 — 部② 「見た目は完全に逆転している」とはどういうことか、「誰よりも誰がどうなのか」が分かるように、三十字前後で説明しなさい。(句読点は一字とする。)

問四 — 部③ 「屈託なく」・⑥ 「生業」とあるが、ここではどのような意味で使われているか、もつともふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

③ 屈託なく

- ア 不安ばかりが先に立ってしまい、何に対してもおびえ、慎重に。
イ 心に気がかりがなく、気持ちが晴れ晴れとしていて、無邪気に。
ウ 細かいことなど何一つ気にかけず、自分の感情に任せて、自分勝手に振る舞いながら。
エ 何に対しても無関心で怒りを感じることがなく、楽天的で心穏やかに。

⑥ 生業

- ア 生計を立てていくための仕事。 イ 生命を維持^{いじ}するために農業にたずさわること。
- ウ 人生を通じての趣味。 エ 後継者に指導し、伝統を伝えながら生活すること。

問五 — 部④「新鮮だろう」とあるが、「三郎」はなぜ、このように考えたのか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 母が人目を気にせず、全く別の人生を歩み始めることができるから。
- イ 母がこれまでしばらくいられた田舎の風習から解放されるから。
- ウ 母がこれまで経験したことのないことを経験できるから。
- エ 母がこれまでがまんしていたことを全て経験することができるから。

問六 — 部⑤「あの父」とあるが、「あの」という表現には、「三郎」のどのような思いが込められているか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア がんこで自分勝手に、家族を振りまわしてきた父親に対する憤^{いきどお}りの気持ち。
- イ がんこで人の意見を素直に聞き入れることができない父親をばかにして見下す気持ち。
- ウ 漁師という仕事に誇りを持って生きていた父を心から尊敬する気持ち。
- エ 漁師という不安定で危険な仕事をしながら家族を養ってくれた父に対して感謝する気持ち。

問七 — 部⑦「うれしく心強く感じた」のはなぜか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 他の家に父親がいない時期に、自分の家に父親がいることで、優越感を感じることができたから。
- イ 他の家に父親がいない中、自分の家には父親がいることで、ほどよい緊張感を持つことができたから。
- ウ 父親不在の時期の長い家庭が多い中、自分には頼れる父親がいることで安心感を覚えたから。
- エ 父親不在の時期の長い家に比べれば、どんな父親であっても、いてくれた方が楽だと思っていたから。

問八 — 部⑧「不服だった」のはなぜか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 母が、父を心から尊敬しており、いつも父のことだけを考えると改めて思い知らされたから。
- イ 自分が先に頼みごとをしていたのに、父の方が優先され、ほったらかされたように感じたから。
- ウ 父の指示に何でも従う母を、自立できていない女性のように思い、頼りなく、情なく感じたから。
- エ 自分の頼みごとを中断する母に、自分への愛情が全く感じられず、怒りを覚えたから。

問九 — 部⑨「どうしようもなく気分屋だった」とあるが、その様子が分かる一文を文中より抜き出し、最初と最後の五字を書きなさい。（句読点は一字とする。）

問十 ――部⑩「父という人間」を「三郎」はどのような「人間」だと判断していたか、ふ・さ・わ・し・く・な・い・も・の・を
次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物事に対する見識がなく、自分の経験だけで物事を判断する人間である。

イ 気性が荒く、おおざっぱで、品がない人間である。

ウ 自分の考えが正しいと思い、様々な考えを受け入れようとしない人間である。

エ 無口で、無愛想ではあるが、愛情にあふれた、感情豊かな人間である。

問十一 ――部⑪「いい気になるなよ」とあるが、「父」がこのような言ったのはなぜか、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大学を出れば、よりよい人生が送れると思ひこみ、現実には不可能なことばかり考えている三郎が未熟なものに思えて、情なかつたから。

イ 勉強をして、いい学校を卒業すれば、人生の成功を手に入れられると考えている三郎が許せず、とがめたかつたから。

ウ その人を判断する材料は、勉強ができるかどうかだけであると考えている三郎が見苦しく、やりきれない悲しみを感じたから。

エ よい成績を取ることで、勉強ができない人間をばかにしようとしている三郎の考え方が危険だと思い、修正しなければならないと思ったから。

問十二

B

には、「(これ以上会話を続けることを) あきらめる」という意味の慣用句が入るが、ここに入る慣用句としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア さじをなげる イ うでがあがる ウ きもにめいじる エ きゅうをすえる

問十三

——部⑫「ひどく醜みにくかった」とあるが、この時の「三郎」の気持ちとしてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の考えとは違う息子を受け止めようと、自らの感情をおさえようとしている父親をふびんに思っている。

イ 自分に反抗する息子を受け止めきれず、息子の言葉に困り果てている父親を人として未熟だと感じている。

ウ 自分の考えを理解しない息子を認められず、憎にくしみを抱く父親が情けなく、子どもじみているように思っている。

エ 自分の考えを押し付け、冷静さを失って、大人げなく怒りをあらわにしている父を見苦しく思っている。

問十四

C

に当てはまる言葉としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア あんたが苦勞している姿は見たくない イ あんたには感謝してるんだよ
ウ あんたみたいにはなりたくない エ あんたと母とで仲良く暮らしてくれ

問十五 中学生がこの文章の特徴について話し合った。その内容としてもつともふさわしい発言をしているのは誰か、記号で答えなさい。

生徒A…故郷を舞台にして、主人公三郎が、父親との関係を振り返っている作品で、三郎の気持ちを中心に書いているけれど、三郎を僕と表現しないことで、読者に客観的な視点を与えているね。

生徒B…三郎の幼少時代の思い出を分かりやすい言葉で書くことによつて、主人公三郎の、ふるさとに対して抱いているもの悲しさを、強調しているのではないかな。

生徒C…父や母、見知らぬ人などをかわるがわる登場させ、場面を入れ替ながら、主人公三郎の生い立ちをよりこみ、三郎がどのように成長したか、時間を追つて読者に想像させている文章だよな。

生徒D…主人公三郎が、一人語りをするような表現で書かれているから、ふるさとに対する三郎の一方的な思いしか書かれていないし、家族との関係についても客観性がなく、よく分からない。

二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

草むらに子供は跳く小鳥を見つけた

子供はのがしはしなかった。^①

けれど何か瀕死に傷ついた小鳥の方でも
はげしくその手の指に噛みついた。

子供はハットその愛撫を裏切られて

小鳥を力まかせに投げつけた。

小鳥は奇妙につよく空を蹴り^②

翻り^③ 自然にかたへの枝をえらんだ。
ひるがえ

自然に？^④ 左様 充分自然に！
さよう

——やがて子供は見たのであつた、

礫のやうにそれが地上に落ちるのを。
こいし

そこに小鳥はらくらくと仰けにね轉んだ。^⑤
あうむ ころ

（伊東静雄『夏花』）

しなかつた||しなかつた

ハット||ハット

愛撫||なでさすってかわいがること。

翻||おどり飛ぶ。

かたへ||かたえ。かたわら。そば。

左様||そのとおり

あつた||あつた

やうに||やうに

仰け||仰向け

ね轉んだ||寝転んだ

問一 次の文の□に適当な言葉を漢字で書き入れなさい。

この詩は話し言葉で書かれた□A語詩であり、五音・七音などの形式にとらわれずにうたわれた

□B詩である。

問二 子供が見つけた時の小鳥は、どのような状態だったのでしょうか。「状態」に続くようにわかりやすい言葉で、十字以内で答えなさい。

問三 —部①「のがしはしなかつた」とあるが、それはなぜですか。その時の子供の気持ちとしてもつともふ

さわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 宗教心 イ 向上心 ウ 道徳心 エ 好奇心

問四 — 部②③ 「小鳥は奇妙きみょうにつよく空を蹴けり 翻ひるがえり 自然にかたへの枝をえらんだ。」とあるが、小鳥はどうしたのでしょうか。その説明としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 小鳥は空から勢いよく落ちて行き、すぐ近くにあった木の枝に引つかかった。

イ まさか飛ぶとは思わなかった小鳥が飛び、そばにあった木の枝に止まった。

ウ 落ちたり飛んだりをくり返し、やつとの思いでそばにあった木の枝にたどり着いた。

エ 小鳥はおかしな動きをし、迷ってはいたがすみかとする木を選ぶことができた。

問五 — 部④ 「自然に」という言葉は、ここではどのような意味で用いられていますか。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人工的に イ 野生に ウ 本能的に エ 特別に

問六 ―― 部⑤ 「らくらくと仰あうむけにね轉ころんだ」という表現から、小鳥はどうなっていると考えられますか。もつ

ともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 安らかに死んでいる。

イ 枝から降りて、休んでいる。

ウ 息も絶たえ絶だえで、死を覚悟している。

エ うまくのがれて、小ばかにしている。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

言葉をくわしく知りたい時、辞典は非常に有効な道具だ。

国語辞典には見出し語が五十音順に並べてある。ただし、「父はいそがしく働いている。」という文の「いそがしく」といった① 詞や、「停留所でバスを降りた。」という文の「降り」といった② 詞は、言い切りの形（文がそこで終わる形）で出ている。また、「おだやかな春の海」の「おだやかな」といった③ 詞は、言い切りの形は「おだやかだ」であるが、国語辞典には語幹（終わりの部分が変わる言葉のうちの、変わらない部分）の「A」で出ている。

また、「学業をおさめる。」の「おさめる」の漢字を知りたい場合、国語辞典には「収める」「修める」「納める」「治める」というように④ が複数あるため、それぞれの言葉の説明をしっかりと読み、正しい言葉を見分ける必要がある。なお、この文の漢字は「B める」である。

漢和辞典は「C」で引く方法が基本である。たとえば「技」という漢字を引く場合はまず「C」さく引で⑤ を見つけ、何ページにあるかを調べ、「C」を除いた「支」の画数を数えて探すと見つけることができる。「C」がはっきりわからないときは総画数で、漢字の読みがわかる場合は読みで引く方法もある。

問一

①

く

⑤

に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 動 イ 形容 ウ 形容動 エ 名 オ 副 カ 連体 キ 接続 ク 感動
ケ 同音異義語 コ 同訓異字
サ にんべん シ しめすへん ス りっしんべん セ てへん ソ こへん

問二

A

く

C

に適当な言葉を書き入れなさい。ただし、

C

は漢字二字で答えなさい。

四

——部の漢字の読みを答えなさい。

- ①彼女は三か国語も操ることが出来る。
- ②勇気を奮って立ち向かう。
- ③お世話になった方に歳暮を贈る。
- ④窓を開けたままにして寝るのは不用心だ。
- ⑤富士山の頂は夏でも雪が残っている。

五

——部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ①スジミチを立てて話をする。
- ②裁判で身のケツパクを証明する。
- ③将棋の世界はシテイ関係を大切に^{しやうぎ}する。
- ④湖でボートからつり糸をタ^らす。
- ⑤となりの家にカイランバンを持って行く。

